

フィールド・プログラムの一断面

——奥中山ワーク・キャンプによせて——

広田 勝一

チャプレン室主催の奥中山ワーク・キャンプは、今年度で17回目を迎えた。参加者は、学生15名とスタッフ3名（さらに教員1名加わることもある）である。学生参加者の希望者は、その年度により若干異なるが、概ね年々増えている。実施時期は、8月中旬過ぎから下旬にかけて行われ、時には猛暑のなかでの作業となることもある。岩手県奥中山にある社会福祉法人カナンの園の成人施設「小さき群れの里」が、われわれがまさにお世話になる場である（以下「里」と略す）。ここでは16歳以上の青年を対象に、日常生活および労働を通して、ひとりひとりの自立の内容を高めている。40人ほどの青年（施設の方々はそう呼ぶ）が生活をするこの里は、1980年に開設された。近くには同法人の児童施設「奥中山学園」（1973年開園）や、

また三愛学舎養護学校もある（1978年開校）。いわば町全体の良き理解のもとにある。町の行事の運動会等にも、青年たちも参加する。しかし里の青年の多くは、重度の知的ハンディをになっている。彼らとの最初の出会いは、立教生にとり正直「当惑」、緊張もある。こうしたスタートから、青年との接し方の問題、ボランティアとは、ワークの意義、自分たちの存在の問題などが必然的に問いかけてくる。

さて本稿ではこうした奥中山ワーク・キャンプのもつ意味づけを中心に記したい。もちろんチャプレン室主催のキャンプは他にもあり、学内におけるこうしたいわばフィールドプログラムの位置づけに関しては、前号で学生部の佐藤氏が沖縄キャンプ報告の中でかなり総括的に言及されているので参照していただ



きたい。

ところでこのキャンプのねらいは私なりに整理すると、一つは、ワークを通して施設に奉仕し寄与するということ、さらには、里の方々（職員も含む）との出会いの体験を通して新たな自分を見出すことである。わたしもこのキャンプに参加して6回目となったが、そのうち1回は海外のキャンプと重なったため3日間だけの参加となった。期間もこれまで10日間プログラムであったが、この数年は8日間プログラムにしている。スタッフも教員が参加できる年もあるが、チャプレンほか2名の職員よりなる。これまでの経験からとりわけこの職員スタッフがキーパーソンとなる。最低2年はと願っているが、引き継ぎは大変良くできているように思う。学内の部署により学生と直接に接する機会のない場合があるが、このキャンプは学生と寝食を共にし、語り合い、労働する、そして指導性を発揮するよき場である。何よりも自分にとってかけがいのない時となり、その後の歩みに少なからずの影響を与えていると思う。今年のスタッフのY氏は、「奥中山での体験の記憶を純粋な形で反芻し、そこで得たある種の達成感のようなものに心底陶醉することは今の私には困難である。なぜなら『奥中山』は私に即答不能な多くの『問い』を提示し、『奥中山』を思い起こす度、その『問い』は私に対して『誠実』な態度を求めているからである……」とふりかえりに記している。



みんなで造る階段

氏の一文だけを引用しただけでは不十分かもしれないが、見出しには『『問い』の始まりとしての奥中山』とある。そしてこの「問い」とともにあることで結ぶ。

これまでのスタッフもいわばキャンプの中心となり、その指導性を発揮してこられたことに感謝している。近年、諸キャンプの見直しがなされているが、このキャンプについて言えば、もう数年は継続性をもって実施することを希望している。

次に学生に視点を当てて考えてみると、参加動機はさまざまである。事前準備は最小限にしており、いわば予備学習はしない。もちろん3食自炊となるため、宿舍の制約もあり生活の準備は欠かせない。学生の多くは、当初は不安と当惑を持ちながらも次第にうちとけてくる。ワークの内容は、その年度によって異なる。簡易トイレ設置、豚舎整備、花壇設置、羊小屋の堆肥だし、道路整備等である。この場合、黙々と作業をし、青年と語り合う機会がない場合もある。しかし彼らは、陰

ながら見ている。また農場では彼らと共同して、作業することも多い。午前、午後の共同作業・ワーク、そして夜にはミーティングといったプログラムが続く。ミーティングでは当初の当惑から、ボランティア論など、さらにその日に起こった出来事、気づいたことなど、日にちを重ねるごとに話題が深まる。もちろんその話題の展開に参加しながらも、時には「それでいいの」と問いかけを必要とすることもあるが、司会・進行はなるだけ学生の主体性を尊重している。この種のキャンプに伴う課題は、自分たちの存在が里の青年の生活リズムをこわし、むしろ妨げとなっているのではないか、という疑問である。今年は、初日そうそう学生の数名が、一人の青年が非常に興奮し、いわばパニック状態になってしまい物をぶちまけたりする姿に出会わせた。この青年は、キャンプなかば頃には落ちついてきたが、その心理のほどは分からない。ある学生は「本当にこの1週間ここでやっていけるのだろうか」と真剣に悩んだ。またこれまではここにこして迎えてくれた青年も反発的になったり、逆に好意的になってくれた人もいる。しかし後半にもたれる里の皆との交流会の頃には学生の積極的な態度が見られる。普段怖いと思っていたSさんにも優しく食事を手伝ってあげる学生の姿をみたりすると正直心動かせられる。お互いの心が開かれてくる時である。ある学生がふりかえて言った。「私たちのほうが青年たちに



ホームでのひととき

ボランティアをされたのかもしれない。たった1週間のキャンプだったのに、私の価値観が逆転した」と。

最後のふりかえりの時、ある学生はこう語った。

僕らは常に走っている。できるかぎりいい靴で足に負担がかからないように全力で。

ゴールにたどり着いたとき、後をふりかえると、空虚な空間が広がっているだけ。

結局、誰が勝ったと言えるだろうか。

青年たちは、裸足で歩く人である。ゆっくり歩けば周りにいる人たちの顔もしっかり見えるし、なにを踏みつけたのかも分かる。誰とも競う必要もない。僕には見えないものが彼らには見えているのだ。みんなに会えてよかった。ありがとう。

またこうも語る学生もいた。「この里に生きる人々は、決して何もできない人達、劣っている人達なのではなく、弱さを持っているが故に、人のなかに愛を呼び覚ますことのできる、貴重な存在なのです。……このキャンプで学

んだ感性によるコミュニケーションの大切さを心にしっかりと刻み、これからの日常生活の中で生かしていきたい」。

キャンプは終わり、そして一カ月後、キャンパーの仲間たちは再びふりかえりを記す。東京にもどりある面では彼らにとっての日常生活が始まった。その中で奥中山をもう一度ふりかえる。そうした文集が、近年見事にできあがっている。ことしの文集のタイトルは「共に生きる」となっている。その表紙には、キャンプの後半全員で作業をした岡の家に通じる階段造りをしたその完成図が描かれている。今頃はこの道も雪で覆われているだろう。しかし去年もそうだが、今年も5名の学生がクリスマスに再び里を訪れ、雪掻きに精をだしていることと思う。キャンプは終わったが、新しい始まりがある。これが奥中山である。

最後になるが、こうしたキャンプの「生活の座」となる里の、広く言えばカナンの園の基本的理念は、端的に言えば、「人間の価値は、神につくられた人間として生まれたそのことにある」。そして里では、今の社会の中では、実に小さく貧しいひとにぎりのわたくしたちだが、神の護りに支えられながら、互いに励まし合い、与えられた自然を大切にしながら真実な生き方をしていきたいと考えている。里はひとつの閉鎖的なユートピアを築こうと



里の職員との懇談会（職員11名参加）

いうのではない。ここで育った小さな群れがいくつも飛び出していきながら、地域社会の中で生きていくことを考えている。

そして、昨年「岩手日報」（新聞）には「捨てたものではない今の若者」と題して、副施設長のS氏の投稿があった。「今、テレビや雑誌に若者のことがいろいろと報道されています。…私が働いている知的障害者の施設に、毎年、立教大学生がワークキャンプと称して訪れます。そしてハンディをもっている人たちと労働を共にし、職員とさまざまなことを語るのです。夏休みを終えるとき、東京に戻るのです。その送別のとき、多くの学生がハンディを持っている青年を前にして『私は来てよかった。何も知らずに生きていた。自分の生きる目標が見えなかったが、これではっきりした』などと言って彼らの前で涙を流していくのです。この光景が16年間も続いているのです。このワークキャンプの費用はアルバイトで蓄えたものだというのです。若い学生を見ていると『今の若者だって、そんなに捨てたもんじゃな

いぞ』と強く思うのです
……」。

また最近施設長の S 氏は「一人の些細な行動を、その背景を探りつつ、受け止める小さな愛。これは大変難しいことですが、小さき群れの里の利用者の一人ひとりが拠り所としたいのは、この小さな愛なのです。それは、私の気持ちを理解してくれる、ここに有る私を尊重してくれる、古傷を癒してくれる、愛です。その小さな愛の実践が、カナンの路線であり、その基本に立ちつつ必要な施設整備を進めてきた結果が、現在の姿なのです」と言う。ここに共



お別れの時

感が芽生えるのである。

もちろん施設側に対する疑問も学生から正直に投げかけられる。しかしこれまでの立教との繋がりには、何よりも大きいものがある。今後も多くの学生が奥中山を訪れることと思う。そしてそこでの出会いが、たえず想起されていくであろう。このキャンプは、人生において何を一番大切にしていたらよいか、何を大事にし、何に関心を持っていったらよいか、わたしたちに問いかけ続けるのである。

(ひろた かついち 本学チャプレン)